
花子とモンスターズ

目田日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花子とモンスターズ

【Nコード】

N8361Z

【作者名】

目田日

【あらすじ】

何が起こったか、目が覚めればそこはモンスターの跋扈する大陸。唯一意思の通じる俺最強！な相棒に引きずられながら、逃げ足だけは早い女子大生主人公が逃げたり、ボケたり、ツツコミしたり、モンスターとの相互理解に苦しんだりしながら冒険し、女版ターザンへと逞しく成長してゆく——のか？そんなお話になる予定。

1 匹目 アイアムジャパニーズガール

サークルの新歓（新入生歓迎会）だったんだよ。朝方までカラオケでワーワー馬鹿みたいに騒いで、足もちの先輩がアパートまで送ってくれて。

部屋に帰って、入学式と合わせてまだ二度しか着てないスーツを脱いで、発展途上にある下手くそな化粧落として、うとうとしながら歯を磨いて。

起きたら風呂を済ませようと思って、ベッドに飛び込んだんだよ、うん。

そうなんだよ。多分、帰った筈なんだよ。

筈なんだよ、筈なんだよ、筈なんだよ……（フェードアウト）。

…ここはどこなの。

やまだはなこ
山田花子、これからますます膨らむであろうキャンパスでの新生活に胸を躍らせ続けていた18歳。おとめ座の乙女、B型。

——いきなりですが、乾いた風の吹く荒野からどうもこんにちは。

こちら前後左右、見渡すかぎり赤茶色の岩山だらけ。天は雲一つなく快晴そのもの。岩陰に避難しているのですが、気温は真夏のように暑くて、さっきから汗がボタボタ垂れています。そして、人の気配はなし、と。

見慣れぬ荒れた大地にて、私、ぽつんとパジャマ一つで素足。場違い感、アウェイ感、共に絶好調。

どうやら現在、遭難中のようにです。

「…アメリカ？ステイツ？ウエストサイド？」

モニュメントバレーやウエスタン映画で見た光景に近いから、アメリカ西部だと思うのだけれど。

一体何の目的があつて一般善良市民の私をここまで拉致したんだろう、謎のカルト組織は。

否、テロリスト集団か。はっ！まさか、どこかの作業員と間違えられたとか……………映画の見過ぎか。

しかしドッキリや悪戯にしては、やり過ぎだよなあ。

……………。

そうか、なんだ、夢だったのか。

傍にあつた硬度が高そうな岩に額をぶつけてみる。痛い。当たり前だよな、ぶつけたんだから。

念のためもう一度。やっぱり痛い。

おうおう神様、やっぱり夢じゃないのかい。そうなのかい。

努めて冷静でいようとふざけてみているけど、これが現実、だとしたら、かなり、怖いことだぞ。

まずどうやったら帰れるだろうか。

道路や轍、電線や石油のパイプ一つでもあれば、その先にある機関や施設を期待して、沿って歩くことも出来たのに。

あるのは自然に均された砂利に、3〜4メートルほどの岩々と、侵食されて芸術的な形になりながら連なる岩山と、ちよぼちよぼと

点在する枯草だけって、どういふことなの。ねえ。

コレが噂の放置プレイというやつか。いまどきの放置プレイって世界規模の域に達してるの？流行ってるの？流行らせてたまるかテメェこの野郎馬鹿野郎。

飲み物は？食べ物は？

川も池も何もない。枯草じゃなくて青々とした植物の一つくらいあってもいいのに。どうやって食べるかは置いて、サボテンも無いなんて、どないなつとるんかい。ここ西部劇とちゃうんかい。

……違うよな、うん。映画はフィクションだ。

自力で歩くにも限度があるよね。水も持たずに炎天下のなか、水平線の向こうまで続いてそうな荒野で、人里を探し歩く体力はない無いつたら無い。ミイラ化してまうよ。

とすれば、誰かに見つけて貰うしかない訳ですよ。

飛行機、ヘリコプター……こんな岩ばっかの所で私が分かるのかな。最近のは速いし、よっぽど注意してないと見落とされそう。それ以前にココを通るのかな。

あとはアレだ。不法入国者を感知する機能とか人口衛星にないのかな。あんだだけシャトル上げてるんだし。……いや、無いな。アメリカじゃ不法入国者なんてキリがないよね。

——オイオイオイ。

どうやって生き延びれと。神様、あんまりだよ。餓死プレイなんて。

「……………誰かー！！！！いませんかー！！！！おーい！！！！ヘルプミー！！！！へーい！！！！アイアム、ジャパニーズガール！！！！」

しーん。山彦さえ帰りやしないなんて。静かちゃんですね。私人ということですか。

これは…寂しいなあ…。

……………。

…うわ、うわわっ。いやだ、この状況で一滴だって水分無駄にしないのに、だめだこれ、やばい、泣く。鼻水出てきた。

怖い、怖いよ、これ。怖い。どうしよう。怖い。夢なら覚めろ、覚めろ、覚めろ、覚めろ…。

2匹目 悲しむ間もなく

ずびずびと鼻を吸りながらパジャマの袖を涙と鼻水で濡らしていると、なにやら、もぞもぞと動くものが視界に入った。

不思議に思いながら、滲む視界を払うために目をぐりぐり拭う。

モリモリモリモリと、5メートルほど先の土が元氣よく盛りあがって塚ほどの小山が出来ているじゃありませんか。

…何じゃこりゃ。

モグラ？こんな所で？え、デカ過ぎじゃないの？と首をかしげながら恐る恐るそのまま様子を伺っていると、そこから生き物が勢いよく土を飛ばして顔を出し………＊★¥∴@※≡△ㄥエ\$（声にならない叫び）！！！！！！！！

土の中からこんにちは。

それはミルキーなカラーをした、超巨大芋虫（推定顔幅1メートル）だった。

優しい色合いとは裏腹に、ぐちゃぐちゃとしていかにも「身体器官です」と主張する肛門に似た口が、ぐばぁ！と開かれた。芋虫という外見にそぐわない立派な牙が、ぎらりと光る。と、同時にビチヨビチヨと凄まじい量のヨダレが辺りに飛び散った。

「うわぎゃあああああああー！！！！！！！！」

反射的に上げてしまった叫びに反応して、キシヤア！と高い声を上げた超巨体芋虫は、土から巨体をもともしない早さで這い上がってくる。まるで蛇のような動きだ。

私の第六感は告げている。今のキシヤア！は「飯見つけたぞォ！」

ヤムシヤ…。

嫌だあああああああ！！！！

「キシィッ！」

「ハア、ハア……わっ、ぎゃっ！」

ぬるりとしたもので足が滑り、派手に身体を地面に打ち付ける。
うおおお何で滑ったあああ！！？……液体？……こりゃ唾液だ
！奴のだ！奴がここまで飛ばしたんだよお！
転んだ痛さを堪え忍び、匍匐^{ほふく}前進で何とか進もうとすると影が差しこんだ。

機械のようにぎこちなく顔を上げる。目前で超巨大芋虫が私を見下ろす。

ヨダレが私の手の上にポトツと落ちてきた。…ジーザス。

もうだめだ…。一思いに食ってくれ…！

私は大の字に仰向けになり、目を閉じた。

お父さん、お母さん、それから妹よ。先立つ不幸をお許してください。花子は芋虫の餌になります。いいえ、聞こえは悪いですがただの芋虫ではありません。やんごとなき芋虫の餌になるのです。きっと神秘的な侵食岩とともに、現住民の方達に神聖視され、祭られていたことでしょう。

ああ、願わくは。死ぬ前に素敵な恋をして、そこそこな彼氏が欲しかったです…。

ぬるりと何かが、擦り剥いて破れたパジャマから怪我の部分を伝う。ああ、食われるのか。ぞくりと、鳥肌が立った。

チュバチュバチュバチュバチュバチュバチュバチュバチュバ
バチュバ…。

え？うわぎゃあああああああ！なぶられてる！！これは
！！舌だ！！なんて太さだ！！なぶられてる！なぶられてるよおお
お！！！！うわあああああああああああああああああああ
！！！！！！

「キシー」

「意外と美味しいな」じゃねええええ！ちよ、ちよ、ちよ、ちよと、ね
え、なんで舐めてるのオ！？

3匹目 あれ…？

「ひーっ！やめ、やめてー！ゾワゾワするううう！」

チュバチュバチュバチュバチュバ…。

と、鳥肌が止まんないよお！大事な何かが削られているような気がしてならない。いや、それより細菌感染とか寄生虫とか大丈夫なのこれ。なんか凄いパジャマの下がベタベタしてるんだけど、手遅れなのか。…というかいつまで続くんだろうか、これ。誰か早く何とかしてくれ！

チュバチュバチュバチュバチュバチュッ。

漸く続いていたなぶり舌がピタリと止まり、離れた。や、やっと食う気になりましたか、旦那。

ビクビクしながら強く目蓋を閉ざして、その瞬間を待つ。待つ。

ひたすら待つ。——長い。

なんだどうしたトイレかと目を開ければ、足元にビル五階分はありそうな超巨大な白い繭が構えていた。おやまあ、白い繭とな。…あれ？芋虫様どこ行った？

キョロキョロと辺りを見渡しても居ないし、土を掘ったような形跡もない。もしかして、もしかしくなくても、この繭なんでしょうか。大きさが相当というか、ミルキーな色も…いや、もう、これだろ。これしか無いでしょ。

「……………はっ！コレは逃げるチャンス！」

繭Ⅱ動けない。変態中って一度ドロドロに身体が溶けるんだっけ

か。

すぐさま起き上がり、繭に背を向け、ダッシュし……あれ？足が踏み出せな……何じゃござらあああああ！！？糸おお！！？

いつの間にやられたのか、両足首を覆い隠すように糸が巻かれている。長大で、柔らかいの信じられないくらい強硬だ。その出どころはやはりというか、繭だった。

「ふぬぬぬぬーっ！！」

奥歯を噛みしめ、全力で一步を出そうとしているけど。ダメだ、全然先へ進めないし千切れない。

変態中も尚逃がさぬと言うのか貴様は。チュバチュバは味見だった訳なのか。私を変態後の食料にするつもりなのか……。変態ってエネルギー使いそうだなあ……。知能高そうだなあ、この芋虫……。

日は傾いて、おやつの三時といったところか。1日で一番暑い時間帯じゃないの。体力はとうに限界。今立っているだけで、筋肉がピクピク震えている。喉が渴いた。汗臭い。途方に暮れた私は、大人しくその場に座り込み、恐らくとんでもない姿になるであろう、芋虫変態後のクリーチャーを想像した。

ウルト○マンに退治されそうな怪獣しか想像できない。出来ればファンシーで可愛い、てふてふになって欲しい。



ぐりゅりゅりゅ。うゝん、腹の虫がおさまらないよ。お腹と背中が、くつつきそうです。喉も渴きすぎて、だんだん意識が朦朧としてきた。ヤバいなあ。

「お腹すいた…のど渴いた…」

…そして寒い。汗で冷えたのもあるだろうけど、やっぱり日が暮れて、この周囲の気温が急に冷えたことが大きい。こりゃ食われる前に死ぬな、私。

もぞもぞと足に巻き付いていた糸が解かれた。逃げられないだろうとでも判断したのかね。全くそのとおりだよ。

地面に横たえ、丸くなっていった身体を糸で引き起こされる。…便利な糸ですね。どうやって動かしてるんだろう、それ。

一方で地面へ伸びたいくつもの糸がぐさっと土の中に突き刺さり、奥へ進んでいく。そしてあつという間に、何かを滴らせながら私の口元に近づいてきた。滴っているもの。鉄分がかなり多そうな赤褐色をした、それは水の様だった。

——…背に腹は変えられまいて。

ほら飲め飲め、と言わんばかりに目の前で揺らされる糸を、思い切ってパクツと口に含んだ。

不思議と味に鉄臭さはなくて、少し塩しょっぱくて、甘い水だった。

美味しい、美味しい。

ちゅーちゅー吸い上げ、次々と差し出される水を体の中に吸収する。飢えていた私は、もう夢中だった。

どんなに頭で死ぬと諦めていても、身体は生きたがっていたようだ。それがなんだか無様で情けなくて、命を簡単に諦めたりして親に申し訳なくて、淋しくて、色んなものが内混ぜになり、涙が出て

く……………るのを押さえるため般若の顔を作る。

うおおおおお！折角の水分を無駄にしてたまるか！二度と前の轍は踏まぬ！踏まぬぞおおお！

——やることは限られている。考えなくては、生き延びる方法を。そして、家に帰る方法を見つけなくては。

4匹目 朝です。

あれ？寒かった筈なのにふわふわしててポカポカしてて、温かい………というより苦しくないか、これ。それに眩しい。うううつ。パチツと目を覚ますと、岩山の間から太陽が昇っていました。ネイビーからオレンジイエローと綺麗にグラデーションしていて、見事なマジックアワー、もとい朝焼けです。空気に昼間の砂っぽさがなく、澄んでいて、清涼感が半端ない。非常に気持ちのいい朝だ。

ラジオのノイズに混じり、体操の神様の声が聞こえるんだ。「さあ今朝もみんなで元気よく始めましょう、ラジオ体操第一〜っ！」——いま体操せずしていつ体操すればよいというのだ、日本人ならば。元々はアメリカの保険会社が始めたことらしいけど、そんなの全然気にしない！

………と思ったまではよかったのですが。動けません。身体中に糸が巻き付けられています。どうやら私は、繭の一部となっているようです。地表から離れ、かなり高い位置に糸で縛られています。

「Oh…」

そういった趣味はないのですけれど、何かに目覚めそうな。この抵抗し難さがまたなんとも…冗談です、ごめんなさい。

びくともしない糸の強度に感心しつつ、なんとか首をひねって超巨大繭の様子をうかがった。

とりあえず、繭に摂取口らしきものは見当たらない。糸を触手の

ように操るから、変態中でも何か食べるのかと思ったよ。

暫らくは食われる心配がなさそうだけど、問題は変態を終えた後だなあ。うう、怖や怖や。どんな怪獣が待ち受けているやら。

逃げれるとしたら、この繭の中でサナギから羽化した直後になるかな。私は理科の授業の実験で育てた蚕かいこを思い出した。

蚕は繭の中にサナギがある。サナギから羽化した蚕の成虫は、30〜40分くらいかけて繭を溶かしながら出てくる。その時点ではまだ元気に動き回ることができなくて、繭から出たあと羽が固まるのに更に30〜40分程かかるのだ。

蚕の変態がこの巨大芋虫にも当てはまるとするならば、蚕の何倍も何倍も何倍も身体が大きいから、羽化して繭から出て動けるようになるまでは相当な時間が掛かって、無防備なはずなのだ。…想像では。うむ、無理やり感が否めないけれど。

繭から突き出るとき、私を縛り付けてる糸の部分も上に近いため多少なり緩むかもしれない。それならチャンスは繭から出た直後じゃないか。落とされないように注意もしないといけない。

……そう易々といくかは疑問だけれども、それっきゃないんだよね思ひ浮かぶ方法が。私お馬鹿だし。

とりあえず中が見えない分、音とか、繭の様子とか、観察はこまめにしないと。

……そういえば、何故か昨日は言葉が通じてたなあ。いっちょ話し掛けてみるか。

「——ねえ、綺麗な朝日だね。そう思わないかい、旦那」

「グルル」

「……まさか返事が帰ってくるとは思ってもよらなかったよ。サナギって鳴くもんなんだね」

「グルル」

「……こりやまた随分と特撮怪獣っぽ……じゃなかった、低い声になったねえ」

「グウ」

「ははは……もしかして、変態は、もう終わりが近かったりするの？」

「グルルル、グル」

「……………さ、さいですか」

……「とっくに終わっている。余計なエネルギーを使いたくないから休んでいるだけだ」、とな。じゃあもう繭の中は完全体なんですね。動こうと思えば動けるわけですか。

いやはや、いやはや、いやはや。

いつも自分の知識が現在に起こっている事象に当て嵌まるとは限りませんよね。うん、真理だ。何が蚕だよ。こんな時役に立てなくて、いつ役立てるといふの理科の実験。蚕という金なる財産を善意無償でくれるにとどまらず、育成アドバイザーというアフターケアまでしてくれた養蚕家のおじさんに謝らねば。

……じゃなくて。どうしよう。こりや逃げられる気がしない。ど

うしたものかなあ。うゝん、うゝゝん…。

………相手は怪獣……かいじゅう……かいじゅう、か。

………ん？待てよ、かいじゅう？そうだ！そうだよ！

逃げられないなら懐柔すればいいじゃない！幸い言葉は通じているし、話し掛けたら応えてくれる程度には嫌われてないみたいだし。懐柔だ懐柔！怪獣を懐柔だ！怪獣を懐柔だなんてよくそんな上手いこと思い付いたな私！

え？それでもない？…ですよねえ。

5匹目 わかったこと

懐柔という名のおしゃべりを、私は芋虫様と続けていった。

内容は自己紹介や他愛ない話、ここについて等、色々だ。そして得た情報がかなりある。

まず、私と出会った芋虫様視点を説明しよう。

私は、芋虫様がいつも餌にしている「ロックアント」というものに間違えられていた。ロックアントとはこの岩場地域に住み、頭・胸・腹の間がくびれた六本足の焦げ茶色の生物で、芋虫様の大好物なのだ。やはり肉食なのですね。

芋虫様はサナギになるまで地中に潜り住んでいるため、目が悪く、パジャマの黒地と黒髪で、全体的に黒く見えたため間違えてしまっていたらしい。

その違いに気付いたのは逃げる私の声と動きで、ロックアント（いつも）と違う、こりゃ見たことない生物だと。ロックアントは危機を感じると直ぐ死んだフリをしてくれる、ちよつと間抜けでありがたい種族らしい。鳴き声は「ギャア！」：悲鳴だよ。

珍しいし、とりあえず捕まえて玩具にして遊んでみるかと興味本位で追いかけるが、なかなかどうして捕まらない。始めは楽しかったがやがてそれにも飽き、仕方なく害のない粘液を使い（普段の狩りでは岩をも溶かす毒を使っているようです）、足を止めさせる。そんなつもりはなかったが転んで怪我をさせたようなので、血を舐めて治してやっていたら、意外に美味いことが判明した。美味いが普段の餌と違うから食いたくはないなと悶々していたら、こんな時にやってきてしまいましたとき、待ちに待ったサナギ化（進化）が。

別に私を食べる気は芋虫様にないらしく（定められた餌で無けれ

ば生理的にダメらしい）、オモチャを見つけたような心境であることが知れて、心底ホツとした。

ふー、やれやれ。それならそうと早く言ってくればよかったのにね。ヨダレの量Ⅱ食欲だとばかり思ってたからさ。

他にもまだあった。芋虫様は「ランドキングビー」という大陸に五体と居ない希少種のモンスターらしい。インセクター系では最強種で、知性もあり、完全体ともなれば数あるモンスターの中でもトップクラスのスピードを誇るのだなどと、自慢げに話された。ついでにオスだそうで。

……インセクター（昆虫）系？何じゃそりゃ、と首をかしげる私に、芋虫様改めランドキングビーさんは機嫌を損ねることなく、丁寧に教えてくれた。

インセクター（昆虫）の他にもドラゴン（竜・龍）、フィッシュ（魚）、プラント（植物）、ビースト（獣）の5つの系統に別れるモンスターがこの大陸にいるのだそう。

インセクターに特徴される固い外殻や六足や粘液を操る訳でもなし、ドラゴンやビーストのような鋭い牙や爪も持たず、フィッシュにしては陸地に平気だし、プラントのように栄養分を自給自足するわけでもない、私みたいなタイプ（ヒト）は見たことがないと。

聞きなれない単語の数々や状況に、いよいよ受け入れざるを得なくなってきた。

——ここは、アメリカでもどこでもない。私の知っている世界と常識も次元も違う場所であることを。



呆然だ。ここに来た経緯も分からないし、モンスターばっかのこの大陸でどうやって協力者を見つけて帰りゃいいんだか、見当もつかないんだから。

呆けていると、思い出したかのように股ぐらがむずむず疼いてきた。

……こんな時でも整理現象は止められないらしいね。シリアスとは縁がなさそうで嬉しいやら、悲しいやら。
ちなみに、まだ繭に縛りつけられたままです。

「あのー…これ解いてくれないですかね」

「グルル」

うーん、何故とききますか。乙女に排泄だなんて言わせるつもりですかね、ランドの旦那。いや、言うけども。

「おしっこです、排泄です」

「グルル」

「そりゃ私だってするよ。生きてるんだし」

「グルルルル」

「えっ。ここでなんて無茶言わないでよ。無理だよ、恥ずかしすぎるって」

「グルル」

「そんな、許されても！　　っ逃げたりしないからお願ひします、
解いてくださいー！　漏れる漏れるって！」

「グ」

「ぎゃああああ！なんで糸がパンツにつ、ちよつ、待つ、やだやだやだ！乙女に何をするつもりだコンチクショーっ！」

「グルッ」

[illegible]

ええ、ええ。ランドキングビーさんに私の羞恥心は伝わりませんでしょうし、理解できないでしょうとも。ええ。いくら言葉が交わせたって人とモンスターでもんね。相互理解は難しいでしょう。えー……結果と、してですね。排泄は、できました、けども。多くは語らまい。皆様のご想像にお任せします。もう忘れたいし、次が怖い。

これが食料としての運命から免れた、代償なのか……。

モンスター・メモ その1 (前書き)

インターバルです。

モンスター・メモ その1

<インセクター（昆虫）系>

主に粘液を操ることができ、六足や固い外殻等を完成期の身体的特徴とするモンスターの系統。基本的に無自我であり、本能で行動する※。同じ系統内で被食（食物連鎖下位）と補食（食物連鎖上位）の関係がある。プラント系やインセクター系を餌とする。

他モンスターと相対的にみると一撃はさほど強くない。しかし陸でのスピードは系統的に最も優れている。

※例外としてランドキングビーなどがある。

<ドラゴン（竜・龍）系>

主に四足・二足、鋭い牙や爪、隙間なく身体を覆う鋼のような鱗などを身体的特徴とするモンスターの系統。炎や氷雪を吐いて操る。高い知能をもち、プライドが高いタイプが多い。フィッシュ系やビースト系を主食とする。インセクター系やプラント系も食べられない訳ではないが、不味い（と思っている）ため好んで食べない。

身体的特徴によりアタック力、ディフェンス力共に優れ、最強系統とされる。しかし、単にスピードのみ見るとビーストに劣ってしまう。繁殖力が弱く、個体数は圧倒的に少ない。

<ビースト（獣）系>

主に四足、鋭い牙や爪、長短な体毛を身体的特徴とするモンスターの系統。ドラゴンのように、炎や氷雪を吐く種もある。知能はあ

るが、好戦的で短気なタイプが多い。インセクター系と同じく、系統内で被食と補食の関係がある。フィッシュ系やインセクター系、ビースト系を好んで食べる。

身体を守るものが体毛しかないためディフェンスには劣るが、補食タイプのアタック力はドラゴン系に勝らずとも引けを取らない。系統全体の傾向としてスピードはインセクター系に次ぐ。

ドラゴン系との因縁が深い。

<プラント（植物）系>

主に自力で栄養分を作り出すことができることを特徴とするモンスターの系統。長く生きているものほど知能が高い。穏やかで大人しく、無害なタイプが多いため、よく被食に遭う。陸でも水中でも生息でき、移動可能。モンスターの餌は必要としないが、ある程度の日光と水、温度は必要。攻撃する力や防御する力、スピードまでない最弱種族であるが、繁殖力が圧倒的に優れ、数も多い。

<フィッシュ系>

主に滑らかな鱗とヒレ、尾ビレ、エラなどを身体的特徴とするモンスターの系統。水中に住みながらも陸に上られる。しかし敵が多く動きがかなり制限されるため、滅多なことでは陸に上がらない。自我はあるが、本能に忠実。臆病なタイプが多い。インセクター系やビースト系ら同じように、系統内で被食と補食の関係がある。主にプラント系やインセクター系、フィッシュ系を食糧にする。

強さはプラント系とそう変わらないが、水中でのスピードは速い。また、極少数であるフィッシュ系の補食タイプには鋭い歯に強靱な顎があり、攻撃する力はビーストに並ぶ。

6匹目 ランド・キング・ビー

繭から降ろしてくれた代わりに、私の腰には糸が巻き付けられた。ハーネスを付けられた犬の気持ち分かる気がするぜ。ワンワン、わふわふつ。……ふう。

——さて、どうしたもんなか。

生きていくため、帰るための何か手掛かりとなるものを見つけていくための協力者となるモンスターが欲しい。

第一候補は厚かましくも、目の前のランドキングビーさんだ。一番身近にいるモンスターで言葉も通じているし、餌として私を認識していない。それに強さも申し分ないと思われ、気に入られている限り身の危険はなさそうだ。

他はどうだろうかと、周りを見渡すと、ただの枯れ草だとさつきまで思っていたものが目に留まった。よく見れば、ちょいちょい動いているではありませぬか。

ふっふっふ。よし、モンスターはっけーん。引き抜いて、土を振り落としてみる。えーっと、確か、プラント系になるのかな。

キーキー鳴きながら、ゴマみたいに小さい目のついた太い根っこが私の手の中で痛そうにじたばた藻掻く。円らな瞳が潤んで、私を見つめる。うわー！なんかゴメンなさい！ゴメンね！葉っぱ持ったら痛いよね！？慌てて元の場所に戻し、優しく、優しく土を被せた。

「グルルル」

なるほど、この子は「サーステイブレイド」というモンスターな

「んですね。可愛い見た目に反してカッコいい名前だな……って、あれ？」

いま、この子の声はただの鳴き声だったのに、なんでランドキングビーさんの声は言葉として分かるんだろうか。

⋮
?
?
?
?
?
?

ぐりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅー。

うおっ、腹からスゴい音が出た。そういえば口にしたのは水だけで、固形物を食べてないなあ。お腹すいた…。

口に出してしまっていたようで、ランドキングビーさんの糸が地面に突き刺さって、例の褐色の水をすすめてきた。うーん、生きるために貰うけども。私でも食べられそうな固形物ってないのでしょ
うか。

……荒野にはなさそうだなあ。森とかだったなら、なんかありそうなのに。

うーん、弱った。私に発言権は認められているようだけど、主権はないのだよ主権は。ランドキングビーさんのお心次第なのだよ…。

下手におねだりして機嫌を損ねさせてしまったら怖いんだよね。

気紛れに分けて貰っている水で生きている状況だし、今ここで見放されると正直、私の身は絶望的だ。

ここは我慢しかないか……。まあ人間、食べ物が無くても水があれば一月は生きていけるってよく聞くし、むしろ食べ物でなく水がある今の状況に感謝しなくちゃいけないんだよね。

——あああああ！　そういえば、まだちゃんとランドキングビーさんにお礼を言ってなかった！

日本人たるもの、挨拶感謝は常日頃から心掛けねばならないというに！何たる失態か！

こくり、と最後に水を飲み込んで、私はランドキングビーさんに笑顔を向けた。

「お水ありがとう、ランドキングビーさん！ 本当にありがとう！」

ドギヤシャアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

え？

何かが破裂するような凄まじい音がしたかと思うと、一瞬の内に土埃があたり一面に広がり、何も見えなくなった。

ゲホッ、ゴホッ。ななななな、なな、なんだなんだ何なんだこりや一体！何が起きた！！

慌てながら、赤ちゃんのはいはいで現在の状況確認を………ん？

とりあえず触ってみる。真つ黒でカチンコチンに固く、節ふしくれ立つて、ギザギザしている。鍋で食べたタラバガニを思い出した。

「グルル」

フルネームで名前を呼ばれた。山田花子、それは私の名前である。
「ゆっくり目線を上げていく。」

鋭い針を先端に、黄と黒が交差する腹部。黒曜石のように硬そう
で艶やかな胸部には、さらに四肢が付く。四肢の上二つは鋭利な鎌
状になっており、殺傷能力が高そうで。大きく広げられた翅^{はね}は厚い
のに透き通ってて、そして明らかになる全貌――。

蜂だった。

スズメバチ。人間サイズのスズメバチ。その頂には、豪奢で繊細
な造りをした金の王冠が眩しい程に光り輝く。

……ランド（陸）、キング（王）、ビー（蜂）とな。

ランドキングビーさんの名前を、この時になって私はようやく理
解したのだった。

7匹目 空中飛行！十オマケ

ランドキングビーさんは想像していたより、だいぶコンパクトな身体に変態を遂げていたのだった。だって幼体や繭がアレだけビツグだったらさ、そりゃ成体もそのくらいのサイズになると思うじゃないの。それって普通だよな？

身長は私の頭二つ三つ分大きいくらい。私が156センチだから、えーっと、2メートルあるかないかくらいの高さになるのかな。王冠は抜いておいて。

……………それにしてもランドキングビーさんは、何故繭なにゆえから出て来られたんだろう。余計なエネルギーがどうのこうの言って、かなり腰が重そうだったのに。どういう心境の変化か。

小さな六角形が敷き詰められた眼は無機物的で、何もたたえず、何も語ることなく、鏡のように私の顔を映している。

——“これ”はモンスター（怪物）なんだぞと、本当に今更ながら、誰かが囁いた。

何を考えているのか全く読めなくて、どうしたらいいのか、分からなくなってくる。文明社会で生きてきたなかでは、無かった経験だ。

蛇（強者）に睨まれた蛙（弱者）。今、まさしくそれを体験しているのだろう。

静かに燃え上がる覇気と、暴力的なまでの強さの差を前に、圧倒されている。

ただ見つめ返すことしか出来なくて、間に沈黙が流れる。ここに

ひとつの絵があるように、両方が両方とも、動かなかった。

先に破ったのはランドキングビーさんの方だった。頭の触角をピクリと揺らして、ゆっくりと身を屈めると、私の目の前で片膝をついた。

よく観察でもするためか、頭部が近づいてきたから、ビクツと肩が跳ね上がった。

「グルッ」

行くぞ…って、え？ドコへでしょうか。

あれ、逝くの方でしたか？冥土deathか、それとも地獄deathか。

「え、ちよっ、わわっ！」

それを問う間も与えられず、鎌の付いていない真ん中の二本に腕を取られ、グイッと身体を引き起こされ。そのまま子供でも抱えるように抱っこされた。

ひいー！背中にあるほうの鉤爪がパジャマ越しに刺さってるって！痛い！イタタタタ！

身体を肢体に預けると深く刺さって痛いので、ランドキングビーさんの細腰にコアラのように抱き付いた。

ううっ、痛いよ！もう！乙女の柔肌は何すんのお馬鹿！声に出すのはさすがに怖かったので苦渋の表情で訴えるもガン無視され、ラ

ンドキングビーさんは筋の透けた透明の翅を細かく振動させた。
ブーーン。

……………この音、やっぱり蜂さんなんですねえ。



「うわー！ー！ー！っ！すごいすごい！綺麗！スッゴい綺麗だよ、ランドキングビーさん！ほら、ほら見て見てあそこ！あんなに岩がちっせえー！あはははは！楽しー！」

「グルル」

「うん、楽しいよ！」

切り立った岩山の連なりの全景は、それは凄まじいものだった。褐色ひとつにも陰影の濃淡があり、硬質そうな岩に幻想的な曲線が描かれていたり、同じ形をしてなくて、見るに飽きない。そして、とにかくスケールが大きい。その広大な面積は、すべてを飲み込んでしまいそうなエネルギーを感じさせる。コスモがそこには広がっていたのだった。

大地は母なり。偉大なり。自然が作りだした芸術が、いま私の^{もと}下にある。

雄大な赤土の大地を上から見晴すことの、なんと気分のいいことか！フハハハハ！蠟人形にしてやろうか！（？）

かなり高度があるけれど、絶景だし、確り抱かれているので怖く

ない。うむ。 ランドの旦那が日除けになってくれているおかげで日差しに焼かれることなく、風を隈無く浴びられるから快適です。うむ。

なんという贅沢をしてるんだろう、私は！

よくも悪くも現金な性格である私は、ランドキングビーさんの目的が何なのか聞くことも、鉤爪の痛みさえも綺麗サッパリと忘れ、空中飛行をキャイキャイはしゃいで楽しんだのだった。

7匹目 空中飛行！＋オマケ（後書き）

《オマケ》

花子の脳内モンスターナンバー001

【ランドキングビー】

インセクター系。希少種で、大陸に五体と居ないらしい。幼体はクリーム色をした芋虫、成体は王冠のついたスズメバチ。スピードはモンスター内でもトップクラスに入る。鋭い鎌状の腕や毒針、糸などで攻撃する（と思われる）。

花子の脳内モンスターナンバー002

【ロックアント】

名前からしてたぶんインセクター系。そしてアリさん。焦げ茶色をしているらしい。岩場に住み、危機を感じると死んだ振りをする習性がある。

花子の脳内モンスターナンバー003

【サースティブレイド】

プラント系。見た目はただの枯草。下の根っこは太くて短いゴボウ。根の方が本体らしく、ゴマのように小さな目が可愛い。

8 匹目 ところ変わって

ブーーン。

初フライトだろうに、私という重りを抱えて飛び続けている翅の勢いは少しも衰える気配なく、絶好調のようです。

あの岩山地帯からようやく抜け出し、土の色が赤みの強いものから茶色に移り変わって、景色にぽつぽつと緑が混じりだしていた。

おやおやおや？これは…もしかして、もしかしくても、期待しているのではないでしょうか、みのさん。

テンションはうなぎ登りで、わくわくさせながら先を見つめっていると、青々とした森がぶわっと広がっているのが見えるではありませんか。ひゃっほーっほーっほーい！

嬉しくて、だらしなく頬が緩むわ緩むわ。これはきっと、私の強い思いにランドキングビーさんが気付いてくれたのね。素敵すぎる。以心伝心、以心伝心。

———ということ、やってまいりましたよ。

舞台は荒野から一転、願い叶って、瑞々しい樹木の豊かな森林へと移ったのであります。

うおおおおおーっ！食料あるかな？あるのかな？あったらいいな！水浴びもしたいよ！



目的のものが見つかったのか、森に少し入ったところでランドキングビーさんが急降下する。そこは赤紫色の丸々した果実が枝を撓たわませる、大木の下だった。

降りながらランドキングビーさんは鎌で果実を枝ごと切り裂き、ぼろりと落ちたものを私がナイスキャッチ。

はて、コレが食べたかったんだろうか。

どんなものだろうと鼻を近づけ、すんすんと果実を嗅いでみると桃みたいな甘い匂いがした。でも、まだ熟れていないのか、クルミのような固さをしている。美味しそうだけど、私は食べられそうにないなあ。残念。

ランドキングビーさんが陸に降り立つ。腕から降ろされた私は、果実の付いた枝を持ち上げた。

「ランドキングビーさん、コレ食べるの？」

「グルルルル」

言われた通り、へたをプチッと千切った実をランドキングビーさんの口元へ。はい、あーん。なんちって。

大顎おおあごが開かれたので口器に放り込むと、ガリガリと噛まれていく音が聞こえて、ボロボロと崩れるように皮が落ちていく。うおー、顎の力までお強いとは…。恐れ入りやした。

「グル」

両手を並べて前に出すと、手のひらの上に、コロンと白くて丸いものがランドキングビーさんの口器から落とされた。

じっと実を熱く見つめていたら、ランドキングビーさんの鉤爪に実を取られた。：トホホ、やっぱり。かと思ったら置かれた。あれっ？ いいの？ わーい！ かと思ったら…。

えっ、ちよ、ちよつと、ちよつとオ！さすがに私でも気付きますよ！なーに私で遊んじゃってるんですか！

「グルル、グル」

...?..?..?..?..?..?..?

37

9 匹目 ランドキングビーさんとピーちゃんの類似点

結局分からなかったので、素直に分からないことを伝えたら、ランドキングビーさんは言葉を返さず、諦めたように触覚をシヨボンと垂れ下がらせた。

……！！す、すいません！自分ってばちょっと可愛いなんて思ってたしまいました、親分！！

鉤爪から実を手のひらに落とされた。ようやく食べる権利が与えられたようです。ニコニコしながら感謝を言う。

「ありがとう、ランドキングビーさん！」

そしたら何故か、ランドキングビーさんは固まった。

どうしたんだろうかとモグモグ食べながら心配していると、いきなり目にも止まらぬ早さで飛び立ち、枝を刈り取りだして、勢い落とさずガリガリガリと皮も削って——今度はとても食べきれない量の実の山をドッサリ渡されたのだった。胸を張って誇らしげに、「グルルル」もつと食えと。

??????

もう、何がなんだか。　ともかく礼を言って、これを食べれるだけ腹に詰めておこうと、私は腕まくりをして奮い立った。



ふーっ。お腹いっぱい大満足、幸せです。甘酸っぱくて大変美味だった。笑顔になりっぱなし。

「グルルル」

「え？ありがとうございます。でも、もうお腹いっぱいです。十分ですよ、へへへ。ごちそうさまでした、ランドキングビーさん」

——そう言ったはずなのに。

ランドキングビーさんはその言葉を見捨て、新たに別の木の実を山ほど持ってくるではありませんか。慌てて私はもう食べきれないんだと訴えながら首を横に振るが、ランドキングビーさんはまた無視して、木の実を持ってくる。

これは、デジャブだ。

ピーちゃん。私はランドキングビーさんに、飼い犬のピーちゃん
の面影を見た。

ピーちゃんとは、私が生まれた年から我が家で飼っていたプードル犬。ついでに、二年前に天寿を全うした。

ピーちゃんは拾い物が好きで、何でも家のなかの落とし物を拾って家族に渡してきた。

いつだったか、私が無くして困ってたものを偶然渡されたことがある。その時私は嬉しくて嬉しくて、ピーちゃんを毛がぐしゃぐしゃになるくらい滅茶苦茶に撫で回して、そりゃあもうべた褒めしま

くった。ピーちゃんも大層嬉しそうで、尻尾はタービンのような勢いだった。

それからというものの、ピーちゃんの拾い物は私に渡され続けるようになってしまったのだ。

もっと褒める褒めると、尻尾が千切れるんじゃないかってくらいブンブン振り回しながら、何度も拾い物を渡してきたピーちゃん。

——そして、ランドキングビーさんの行動。

褒めてはないけど、ありがとうは言ったよね。うーん。もしかして、ありがとうが嬉しかったからだとか、気分が良かったから…？

犬とは違うんだと分かってはいるよ。けれど——鉤爪の滑らかな曲線部で頬をツンツンいじられている、今のこの状況。ツンツンツンツン。そんなにツンツンされても、何も面白い返しはできませんよ、私。

そういえば感謝の言葉に笑顔のバーゲンセールだったなあ、と振り返ってみる訳ですよ。笑ったことと、何か繋がりがあそうだとは思いませぬか。

……………だとしたらこのモンスターは私が思っている以上に感情豊かで、可愛いのもかもしれないあと、胸がくすぐったくなった。へへへ。



えー、ほのぼのした雰囲気はどこやら……いや、そもそもほの

ぼのしていたのか疑問ではありますが。

何がランドキングビーさんを突き動かしているのか、突如としてただいま私、糸のハーネスを付けられ、散歩をさせて頂いております。やっぱり糸は使えたよ。口からシューって出してた。

さて、と。森の様子でもお伝えしてみましようかな。

色の濃い緑が密集して広がっています。大小様々な形をした葉の木はヤシのように繊維の付いた幹でありながら、杉やヒノキのように直線的で、どれも高い。それに葉が多いものだから、森は全体的に薄暗くなっている。地面には背のある草がなく、苔こけばかり。

杉・ヒノキとヤシが交配して新種ができるようなことになったら、こんな木になるのかな。南国のようで南国のようでない、不思議な景色です。

この一つ一つもモンスターなのかな？と思って木に話し掛けてみたら、それを見ていたランドキングビーさんに鼻で笑われてしまった。どうやら植物とプラント系は別のものなのだそうです。

プラント系は植物に擬態した動物だという認識で合ってるんだろうか。でも動物は自分で養分を作ったりしないし……ああ、動物植物！そういや中学生のときの理科で習ったなあ、ミドリムシとか。

10 匹目 オモチャと雌

ちよつと分けて貰った糸束を指に巻いて歯ブラシ代わりに使いながら、てくてく森の中を進んでいく。武士につまようじ、花子に糸ブラシってか？

すぐ後ろには保護者のランドキングビーさんが、手綱を握りながら付いてくる。お世話になります。

さつきは失礼にもピーちゃんと重ねてしまったけどね、考えてみりや立場的にピーちゃんなのは私だったよ。あつはっはっは。バカだなあ、私。

てくてくてくてく。

景色は相変わらず、木ばかり。それにしても静かな森だね、小鸟のさえずり一つないよ。

鼻孔に清涼感。緑の匂いって、感じとるものだったのかと初めて学ぶ。ひんやりとした風が、頬を^{くすぐ}擦り、髪を揺らす。

日があまり届かないから、ここは涼しいなあ。森林浴やで、森林浴。癒される…。

何気なく足を見ると、土や苔が足背や指にこびり付いていた。爪の隙間にも入り込んでる。うへえ。

そうなんだ、なんだかんだで意識から外れてたけど裸足なんだよね、私。…しまった、意識したら気持ち悪くなってきちゃった。当たり前のようになっていた文明（靴）の偉大さをこんな形で味わうとは、人生って何があるか分からないもんだなあ。

しみじみしながら苔に擦り付けるように汚れを落としていると、後ろからビンツと腰の糸が強く引っ張られ、尻餅をついて倒^こけた。

「あたっ！」

お、お尻が、お尻があ……！昔がクッションになったとは言え、私、立ってたんですけどオ！安産型だったから良かったものを、貧相な尻だったらパッキリ割れてたぞ！（？）

尻をさすりながら不機嫌顔で引っぱり犯を振り向くと、意外と近くに居てビックリ。さっきは3メートルくらい離れたところにいたのに、何故に目の前へ。見上げると、複眼をギラリと光らせながらランドキングビーさんってば、めっちゃこっち見えます。

えっ、何か私したっけ？

冷や汗をかきながら自分の行動を急いで思い起こしていると、鉤爪で足首を取らた。チクリと針を刺したような痛みで、身体に震えが走る。

「痛いっ！」

そのまま持ち上げられ、視界が180度ひっくり返る。反射的に手を地面につけると重心は私に移って、はい、逆立ちのいっちょ出来上がり。

……逆立ちなんて、体操の授業以来だなあ。久しぶりにしたよ。しかも凶器で補助付きときた。

ランドキングビーさんは私の足をじっと見ている。何か気になることでもあったのかな。

「…グルッ？」

「…いや、別に足に怪我とかはしてなかったんだけどね。今まさに

貴方の爪で流血中という」

「…グルル」

「——なんでランドキングビーさんは謝ってくれるの？」

「グルルル」

思ったことを素直に伝えてみたら、「お前は雌だろう」という答えが返ってきたよ。そっと足が離されたけど、私は逆立ちしたまま凍った。

これは何とツツコミすべ…違った、コメントすべきなの。この性格や口、没個性的な顔等のおかげで人間の男には「良い奴だけど」評価でずっと友達止まり、女として扱われた経験がなしというのに、モンスターには一人前に雌認定。いや、待て、落ち着け私。それよりも問題は、先の「珍しい生物」ではなく、「雌」と認識が変わっていることじゃないの。………………。あれか。排泄のくだりでか。

「グルル？」

違ったか？——いや、確かにヒト科ヒト属ホモサピエンスのメスになりますけども。こう、私の中の何かがせめぎ合って、複雑な気分になる。

「い、いや、合ってるよ。私は…雌で、す」

雌ですけども。

雌と認められていることに若干の貞操の危機を覚えている私は、自意識過剰なんだろうか。

ランドキングビーさんからアピールとか、求愛っぽい派手なアクションや、言葉もなかつ——いや、本当になかったか？あの水や果実や木の実はどうなるんだろう？

ぐるぐる考えを巡らせている内に、血の出ってしまったところに糸が包帯のように巻かれていた。キツすぎず緩すぎず、丁度良い。

——そう、たまに加減ができていないけど、ランドキングビーさんは私に優しい。それはオモチャを大切にしているのか、子孫を残すため雌の機嫌をとっているのか。知るのは、怖い。もしも、もしも仮に後者だしたら、私は……？私は？

うわ、どうしよう。ランドキングビーさんにどう接したらいいのか分からない。

バカ、何やってんだ早まりすぎてるだろ私。落ち着け、落ち着け、落ち着けて。

ボスンと背中から倒れると、ランドキングビーさんの頭部らしきものが上から覗き込んできて、目尻を鉤爪で触れた。今度は刺さらない。

「……グルルル」

「こ、これは流血でなくて……あの、目の汗です。あの、あんまり、私を混乱させないで、いただけませんか。心臓にわるくて、寿命、縮んじゃう」

「グ、グルル」

うん、善処すると言ってくれるのはありがたいんだけど、その氣遣いで更に不安が大きくなってしまうんだなコレが。どうしようもねえな。

——考えても仕方がないことみたいだから、いっぺん泣けるだけ泣いてスッキリさせることにする。

右往左往して動揺をみせるランドキングビーさんなんて初めて見るし、面白いからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8361z/>

花子とモンスターズ

2012年1月7日02時46分発行